漢検 漢検1級・準1級合格者のさらなる学びのために
生涯学習ネットワーク

会員通信

2025.2
Vol.47

●ネットワーク会員に聞きました!
「「ここが面白い」1級・準1級の世界」…… 1
●第39回 研修会報告……2・3
●漢字の小径(コラム) …… 4
●1級合格者一覧、漢字クイズ …… 5
●漢検1級が最高峰たる所以 …… 6
●合格体験記 …… 7
●ご案内 …… 8

ネットワーク会員に聞きました!

今回のアンケートテーマは「「ここが面白い」1級・準1級の世界」です。(回答者:42名)

自己研鑽

10代 準1級 漢字ができる人と周知されていると、「あの漢字どう書くんだっけ」、「この漢字何て読むの」と頼られる可能性がある。役に立てていると実感出来るのはほんの僅かな時間だけかもしれないが、その喜びが、更なる漢字学習への意欲を増進させてくれる。

知識・自己研鑽

60代 1級 「漢検上位級の習得は、自身の生涯学習の可能性を広げることに資する」と言える。
「漢検上位級の習得は、自身の論理的考察と情報発信の可能性を広げることに資する」と言える。

知識

10代 準1級 古文や漢文を読むときに簡単に読める点。また、近代文学をより楽しむことができる点。

30代 1級 語彙が増えたことで、小説・漫画・演劇を鑑賞するときに読み取れる情報量が増え、趣味の時間が豊かになりました。

30代 1級 準1級、1級の学習をするにあたって自然と語彙が増え以前より幅広い漢字を生活の中で使いこなせるようになった。いつの間にか読み書きに加え意味を説明出来るようになっていたので、職場の人との会話の中で役立つ。

50代 準1級 学習塾の講師です。漢字の成り立ちや、難しい読みの漢字などを子どもたちに伝えると、とても面白がってくれます。漢字好きな子どもが増えてくれるといいなと常々思っています。

知らない言葉に出会える喜び

30代 準1級 狼狽や迦陵頻伽(かりょうびんが)、饕餮(とうてつ)など、古代の素敵なモンスターたちを知ることができるのが魅力の一つです。

30代 準1級 一般の方は「漢字」と聞くと「読み」ばかりに注視し、難読漢字について読めるという事を問うてきますが、それ以上に深い世界があるということを知ることができます。例えば類義語や対義語、諺や四字熟語など広い日本語の世界を十分に楽しめることができます。

30代 準1級 今まで学校で習ってきた漢字に意外な読み方があったり、逆に日常生活で意識せずに読んできた漢字が実は表外読みだったり…という意外性に出会えることが魅力ではないかと思っています。

50代 準1級 今まで前後の文章から類推したり、勘で読んだりしていた漢字が正しく自信を持って読めるようになりました。根拠や意味が分かって読めるようになったら、予想以上にすっきりして文字の世界の霞がパァーッと晴れた感じです。ひらがなだけでしか存在しないと思っていた言葉のほとんどに漢字が当てはめられることに軽く衝撃を受けました。

60代 準1級 「倚門之望(子の帰りを待ちわびる母親の情愛の例え)」という言葉に出会い、一人暮らしの母親に毎日電話をかけるきっかけとなった。この四字熟語に出会わなければ母への気遣いも特に無く、日々過ごしていた。

編集部より コメント
ご回答ありがとうございました! 1級・準1級の学習で身に付いた語彙力を趣味や職場など様々な場面で活用できる「面白さ」、知らない世界を沢山知れる「面白さ」など、面白さの種類は百人百様です。
これからも漢字の「面白さ」を発見・追求しながら、今後の学習に励んでいただければ幸いです。

研修会報告

第39回 会員向け研修会を開催いたしました。

2024年11月3日(日・祝)に漢検 漢字博物館・図書館(漢字ミュージアム)にて、
会員向け研修会を対面開催し、55名の方にご参加いただきました。
ご講演内容を簡単にご紹介いたします。

「漢字の音読みと訓読みの歴史―文字と言葉の不思議な関係―」

奈良女子大学 准教授　尾山 慎 先生

呉音と漢音

一言でいえば訓読みは日本語で、音読みは中国語の日本訛りです。漢字は中国の文字であるため、理論上は訓読みよりも中国の発音由来である音読みの方が先にあることになります。

音読みの種類では、呉音・漢音がよく知られています。「治」を例にあげると、呉音は「政治」の「じ」、漢音は「治療」の「ち」です。呉音は朝鮮半島からの仏教伝来に伴う中国漢字音の朝鮮語訛りで、漢音より先に日本に伝わっています。朝鮮や日本で咀嚼された音なので、中国語の原音とはかなり離れています。様々な研究はされていますが、呉音のもともとの発音を復元するのは難しいです。

日本の呉音は中国の唐で通じず、遣唐使たちは唐の長安の漢音を学習すべきと痛感しました。通用しない「呉音」をなくして、「漢音」の一本化を試みましたが、現状呉音は日本語から消えていません。これはお経を読む漢字音として呉音が定着していたことが背景にあります。例えば「般若心経」は漢音で読むと「はんじゃしんけい」ですが、やはり口が呉音の「はんにゃしんきょう」で覚えていますので、切り替えが難しかったのです。

結果、儒学は漢音中心で、仏教は呉音中心という二層構造になりました。

呉音は「行(こう)」「如(じょ)」を「ぎょう」「にょ」で言うなど、仏教に関係する言葉が多いです。「文書(ぶんしょ=漢音)」と「文書(もんじょ=呉音)」のように、同じ言葉の発音を変えて意味も分けるのは、日本語でときどきある現象です。この時も呉音のほうが古く、意味が限定的です。

「行灯(あんどん)」や「風鈴(ふうりん)」のように、「唐音」と呼ばれる、言葉と共に入ってきている断片的な漢字音があります。中世から近世にかけて禅宗とともに入ってきましたが、既に漢音・呉音が基層をなしており、日本語体系に大きな影響は及ぼしませんでした。

室町時代の写本『節用集』には唐音が収録されておらず、「風鈴」に「フウリョウ」という振り仮名がありました。つまり、「フウリョウ」のほうがこの当時は一般的な読み方だったと考えられます。

訓読の歴史

漢字の訓読みの歴史を見るには、訓読の歴史を遡る必要があります。『万葉集』に「人言を繁(しげ)み言痛(こちた)み己(おの)が世にいまだ渡らぬ朝川渡る」という歌があります。和歌なので日本語が先で、それを漢字で書いたと考えられますが、ここに「未渡朝川渡」とあります。「いまだ渡らぬ」を「未渡」と書けるということは、「未」を「いまだ～ず(ぬ)」と訓読していたことになります。日本人はすでに漢文を訓読し、漢字を使って日本語を書くという逆出力もしていました。

訓読が実践されていた現場は、大きく二つあります。一つは仏教界、もう一つは儒学界です。官僚たちは中国の四書五経などを読むのが仕事であり、仏教界はお経を読み書きします。両方に共通するのが漢文でした。

訓点は漢文を読むための記号類の総称です。訓点がついた最古の証拠のひとつといわれる『成實論』は天長5年、826年の仏教関係資料です。実際には、これより前から訓読をしていたと考えられます。

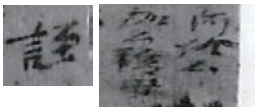
漢字は文脈の中で読みが確定されます。それを抽象化して抽出できるのは、文字との結びつきが強くなったとい

うことを意味します。逆に結びつきが弱く消えた訓や、一時的なもので終わった訓も多くあったようです。

例えば『万葉集』に「去過難寸(ゆきすぎがたき)」と出てきます。たしかに中国語で「去」は「行く」という意味です。日本語でいまは「さる」ですが、『万葉集』では「ゆく」として多く使用されています。

『類聚名義抄』では「見」という見出し字の下に「ミル」「ミユ」「マミユ」と訓があります。更にその下には、現在では全く馴染みのない訓があり、それらは出典が書かれていないので、字によっては本当に唯一どこかでそう訓がつけられたことがある、というものも交じっているかもしれません。

奈良時代に訓読されていた証拠に、北大津遺跡から出土した木簡があります。「誣」は「誣」の異体字で、「騙す」という意味です。「誣」の下には「阿佐ム加ム移母(あざむかむやも)」と説明があります。しかし、「誣」に推量の「む」や疑問の「やも」の意味は含まれておらず、「あざむく」までであるはずで、ということは、なんらかの文脈から付属語もふくめて一緒に切り取ってきて記していると考えられます。やはりこれも訓読が奈良時代から行われている証拠だといえるでしょう。



変化する読み

「設立(せつりつ)」の「立」は『p入声音』といい、もともとはpで終わる「リプ」のような発音でした。「建立(こんりゅう)」や「立木(りゅうぼく)」が本来の使い方です。「リツ」は日本側で作られた漢字音「慣用音」です。

慣用音に因んだ話ですが、現代では「撹拌(かくはん)」「消耗(しょうもう)」「輸出(ゆしゅつ)」と読まれています。しかし、本来は「こうはん」「しょうこう」「しゅしゅつ」という読みであります。

消耗の「耗(こう)」は横に「毛(もう)」が入っていて、部首読みされていたことからきています。本当は「こう」と読みますが、社会的には知られていないので、「もう」で正しいことになっています。このような中国伝来ではない漢字音は身の回りに潜んでいます。

『大漢和辞典』で一番長い訓と説明がある「砉」の「ほねとかわとがはなれるおと」ですが、説明的なためこれを訓と読んでいいのかは問題です。この漢字は元々肉を捌く時の音を「砉然(かくぜん)」と説明するために使用されていました。ただ日本語側にはこれに該当する言葉がないため、説明的になり、結果それを訓と称していたのかもしれません。

次に、古い時代の人たちが音や訓をどう捉えていたのか紹介します。

『古事記』は序文で「古い時代は言葉を文字にするのはとても難しい。訓だけで書くと細かい概念が伝わらないし、音だけで書くと長くなりすぎる。だから両者を交ぜる。」と述べています。音は一字に対して一音を当て字で書くので長くなります。交ぜて書くのは合理的です。

『宇津保物語』では「一度(たび)は訓(くに)、一度は音(こゑ)にて読ませたま」とあります。「訓」は漢文の訓読、「音」は音読みで読むということです。仏教界は音読みを残していますし、漢文の学校教育ではもう訓読み(訓読)しかしませんが、『宇津保物語』はそれを一度に両方やっていて興味深いです。

すべての外国語同士に言えることですが、日本語と中国語で意味がぴったり合うことはありません。そもそも完全一致していると確認する術もなく、ずれていると考えたほうが言語学的には正しいです。実際、中国の人の山や川に対する概念は、日本とは違います。

漢字のほうの範囲が広く、日本語がすっぽり収まる場合があります。「下」は「した」のほかに、「しも」「げ」という読み方もあります。漢字の範疇の中に日本語が多く入ると、一つの漢字が読み方を多く持ちます。あるいは、「捺」と「推」のいずれも日本語では「おす」とよめ、また漢字で書き分けています。「はやい」を「早」と「速」で書き分けることなど、このようにして、異字同訓や同字異訓ができます。

日本語の難しさを象徴する例文として「11月3日は祝日で日曜日の日です」があります。この例文には「日」が五つあり、全部読み方が違います。日本語は発音が少ないですが、これに反して文字の学習量がたいへん多い言語です。平仮名50文字、片仮名50文字、そして漢字は1000字覚えても小学校6年生と一緒です。言葉ごとに、さまざまな音訓の歴史を背負っていますので、この手の読みは言葉ごとに覚えていくしかありません。

漢字の音訓は歴史の中で積み上げられてきた、日本語の年輪のようです。その文字との交渉の中で、日本語は成長してきました。音読み訓読みは、漢字、漢語との交渉であり、私たちはその淘汰を生き抜いてきたものを学んでいます。

漢字の小径

漢字研究の大通りから一歩わきみちに踏み込めば、また違った景色が広がっています。このコラムでは漢字文化研究所の研究員が「漢字の小径」をご案内します。
漢字文化研究所とは、日本文化の側面から日本の漢字をつまびらかにする調査研究等を行うために、日本漢字能力検定協会内に置かれた組織です。

漢字文化研究所・主任研究員
田中 郁也

『辞源』とカタカナ語

先日、某アンケートに答える機会がありました。そこには「価値発見におけるフレームワークやアイデエーションのための手法を活用し、ステークホルダーをファシリテートしながら顧客・ユーザーのニーズを基にアイデアを発散させ、バリュープロポジションを定義する」などと、カタカナ語が散りばめられていました。原語どおりの意味で使いたいからなのかもしれませんが、ふんだんに使われているカタカナ語に辟易してしまい、意味を調べる気すら起きずに適当に回答してしまいました。

アンケートを眺めていて、ふと、清末中国の旧知識階級も、私と同じ気持ちだったのではないかという思いがよぎりました。中国初の近代的辞典として名高い『辞源』(1915年)の作者陸爾奎は、辞典編纂の背景となった当時の状況について次のように記しています[1]。

> 癸卯、甲辰の際、海上の譯籍、初めて行はるる。社會の口語驟かに變ず。報紙は文明を鼓吹し、法學、哲理の名辭、稠疊して紙幅に盈つ。然れども之を内地に行へば、則ち積極・消極、内籀・外籀、皆な何の語たるかを知らず。是に由りて縉紳先生、摒絶して觀るなし。おほむね新學を以て相い詬病す。

(大意)1903-04年頃、上海で翻訳書が大いに流行した。社会で使われる口語が急に変わってしまい、新聞紙面には西洋概念を翻訳した漢語で埋め尽くされるようになった。しかし内陸部の人には積極・消極、内籀・外籀(帰納・演繹:田中注)などという言葉の意味が解らない。そこで、知識人たちは拒絶してしまって翻訳書や新聞を見ることがなく、西洋学問を罵りあっている。

清末の中国では、新造の翻訳漢語が新旧両社会を隔てる溝になっていました。この状況を憂えた陸爾奎は『辞源』を作り、地名や人名などの百科事典的項目に加えて、新しい翻訳漢語、例えば「哲学」や「概念」などといった言葉をも採録して解説したのです[2]。

『辞源』は、中国で初めて字と熟語の両方をならべて解説した辞典としても著名です。漢字は、仮名やアルファベットとは異なり、一文字が単語そのものを表すという大きな特徴があります。つまり、『康熙字典』のような単字辞典さえ手元にあれば、文語文を読解するのに大きな不都合はないということになります。だから、字と熟語とをともに解説する辞典が20世紀に入るまで作られなかったのです。しかし、特に口語の中では昔から熟語も多く使われてきた[3]ので、紙幅が膨大になることを厭わなければ[4]、熟語をも掲出する方が便利に決まっています。そのため、『辞源』が始めた【字+熟語】掲出方式は、後の多くの漢字辞典が採用するところとなりました。

ともすれば後者の、つまり掲出方式の刷新ばかりが注目されがちな『辞源』という辞典は、しかし、利便性の向上を第一の目的として作られたものではありませんでした。上で見た通り、作者陸爾奎は、近代化に遅れ瓜分の危機にある祖国のため、翻訳漢語という新旧両社会を隔てる溝を埋めようとして、この辞典を作ったのです。

一方、同時期の日本の漢和辞典『漢和大字典』(明治36〈1903〉年、三省堂)には、そのような強い使命感が見て取れません。この辞典は世界で初めて字と熟語をならべて解説した画期的なものなのですが、『辞源』とは異なり「哲学」や「概念」といった翻訳漢語は掲載されていません。親字の後にその字を使った下付き熟語をならべることからもわかる通り、『漢和大字典』は漢詩文制作に役立つように作られたものでした。日中両社会の置かれた状況の差は、辞典の編纂動機にも大きくかかわっていると言えます。

ちなみに、「積極・消極」といった翻訳漢語は、今の中国では常用語になっています。私もカタカナ語を拒絶するばかりでは時代に取り残されてしまうのかもしれませんね。

1. 『辞源』初版巻頭「辞源説略」の「編纂此書縁起」。
2. いずれも西周(1829-97)による翻訳漢語。西周の翻訳漢語については手島邦夫氏に一連の研究があるので参考にされたい。
3. どの程度熟語が使われていたのかについては邱冰『中古漢語詞彙複音化的多視角研究』(南京大学出版社、2012年)などを参照。
4. 例えば、現代中国の辞典学者史有為氏は、小型にすることができる単字辞典は現代でも一般の利用者にとって効率が高いという(「字典演化四議」『辞書研究』2022-2)。

案内告知

Information announcement

横濱漢字の会

会 員 数：22名（2024年10月現在）
活動日時：毎月第二土曜日 9:30～12:00
活動場所：川崎市産業振興会館 会議室（JR川崎駅より徒歩7分）
活動内容：主に漢検2級～1級レベルの漢字・日本語の学習、及び会員の自由テーマでの発表

※当会は2025年5月に25周年を迎えます。半世紀にわたり活動を続けてこられたこと、会員並びにこれまで関わって下さったすべての方々に感謝申し上げます。
当会に興味のある方、お気軽にご連絡ください。

漢字クイズ 意外な漢字 読み方編

今回は、意外な漢字の読み方について出題します。
それぞれ何と読むでしょう？

① 磁（4文字） ② 鯖（4文字） ③ 署（4文字）

解答は8ページへ

漢検1級が最高峰たる所以

漢検1級・準1級が一括りに「別格」とされるのは、常用漢字を超えた範囲が出題対象である点はご承知の通り。ただ1級と準1級の間にも難度に大きな差がありますが、これをご存知なのは読者の皆様だけかもしれません。

この差が分かるからこそ、受検をためらう方も多いとお聞きする「漢検1級」。今一度、最高峰である「漢検1級」の出題内容についてご紹介しましょう。

読み問題

2024年度検定問題より ※問題形式と設問文は実際の検定と異なります。

次の熟語の読みを**ひらがな**で記せ（音読み）。

①平仄　②雛馬　③齔童
④竇窖　⑤朶頤　⑥薜衣

配当漢字の数だけでなく漢字や熟語の性質が準1級からは大きくかわり、ハードルの高さが感じられる読み問題の例。準1級に合格する実力があっても、1級漢字を含む読み問題からはその難度がうかがえるでしょう。このような語が次々と出てくる「読み問題」が検定問題の冒頭にあるため、尻込みしてしまいがちですが、1級のすべてがこのようなトーンというわけではありません。

書き問題

2024年度検定問題より ※問題形式と設問文は実際の検定と異なります。

次の下線部分の**カタカナ**を**漢字**で記せ。

①端午の節句に**コイノボリ**を立てる。
②渡来人が大陸から新知識を**モタラ**した。
③依然住民の不満が**クス**ぶっている。

読み問題と異なり、耳で聞いてわかるような語彙といえるのではないでしょうか。とはいえ、書こうとすると一筋縄ではいきませんので準備は必要となりますが、読み問題との違いは明らかです。

1級ならではの出題形式

2022年度検定問題より ※問題形式と設問文は実際の検定と異なります。

①～③の意味を的確に表す語を選択肢から選び、**漢字**で記せ。

れいしょく　しょくげん　りゅうせつ

①前と違うことを言う。うそをつく。
②血相を変えること。怒りの表情。
③高い鼻。鼻柱が高いこと。

語義→語音→語形と思考を進め、与えられた漢語の意味と的確に対応する熟語を漢字で表記します。

1級は漢字検定の最高峰であり、多くの方にとって難度の非常に高い検定であることに間違いありません。しかし、1級に挑戦するのは漢字力を充実させることであり、より文化的に向上する生活を目指した生涯学習のひとつと言えるでしょう。

解答	読み問題　①ひょうそく　②すいば　③しんどう　④とうこう　⑤だい　⑥へいい 書き問題1　①鯉幟　②齎　③燻 書き問題2　①食言　②厲色　③隆準

合格体験記

1級に初めて合格しました！

漢検の最高峰1級に初めて合格した会員の喜びの声をご紹介します。

令和6年度第2回で達成しました。受検7回目、勉強期間は2年半ほどでした。

合格に向けては反復また反復、スマートフォンの単語帳アプリをひたすら繰り返しました。これなら1分未満の細切れの時間でも成果が上がります。楽しい！

忙しい大人の皆さんにこそおすすめできる試験です。不合格でも失うものは無いし。

1級の勉強は、辞書や過去問のほか、ブログや動画配信などインターネット上の情報が不可欠でした。発信者の皆さま、誠にありがとうございます。

受かった今、読書をしていて受け取れる情報量が増えたと実感しています。漢検は「文字の」「単語の」読み・書きの試験で、それらを駆使した「文章の」読み・書きは問われません。なのに文章を読む力が上がっている。語彙は言語の基礎ということでしょうか。楽しい！

受検のきっかけは、自分の名前の漢字が1級配当だと知ったことでした。なので「名実ともに漢検1級」を名乗れるようになり、満足しています。

とはいえ今回、国字を間違えるなど情けない失点もあり、基本的な知識を固め直すのを目標にまた受けるつもりです。合格は全くゴールではなかった……

でもそれもまた楽しい！ みんな1級受けよー！

（小林 菫子）

小林さんへのコメント

1級合格、おめでとうございます！
とても楽しく学習されていたことが文章から強く伝わり、私も大変嬉しく思います。
普段の読書で学習の効果を実感されたとのこと、担当者として冥利に尽きます。
今後も1級に挑戦されていくこと、私も陰ながら応援しております！

私は高校2年生で令和6年度第2回の漢検1級に合格しました。中学2年生の頃に漢字にハマり、中学3年生になってからは、修学旅行に漢検漢字辞典を持っていく程のハマりようだったこともあり、2ヶ月の勉強で漢検準1級に1発合格することができました。その後、高校進学と共に1級の勉強を始め、そこから約1年半をかけ、2回目の受検で合格することが出来ました。

勉強を始めてからは、通学の電車の時間や、授業合間の休み時間などの空き時間をほぼ全て1級のwebサイトを解くのに費やしました。これは、楽しくやれていたので続けることができました。そして、サイトで基礎が固まってきてから問題集や過去問、模擬試験を並行して行いました。解いた過去問、模試の合計は全部で約50回分にもなりました。それらを解いている間にあった様々な発見によって、私は勉強を続けられたのだと思います。

受検日から発表までの約1ヶ月は不安な気持ちが続いていたので、合格が分かったときは喜びよりも安堵の気持ちが勝りました。

今後は、漢検という枠に囚われず、漢字全体を学び、そして、様々な人に伝えていくことを目標として、日々努力を続けていきたいと思います。

（簛先穂）

簛先穂さんへのコメント

1級合格、おめでとうございます！高校2年生で成し遂げるとは、大変素晴らしいです。
厖大な量で大変だったと思われますが、空き時間を上手く活用し学業と並行しながら学習を進められたのですね。
新しい発見に出会う楽しさを見出せるその漢字への情熱・愛が、合格において大事だと改めて感じました。
簛さんがこれまで培われてきた知見を活かして、今後ご活躍されることを願っております！

この度、令和6年度第2回を受検、12回目の挑戦で合格することができました！

初受検では手に入れることができる書籍はすべて使い挑戦しましたが、結果は124点。1級の洗礼を受けました。その後は書籍に加え、有志の方々のHPにある演習問題を印刷、分野別に編集しノートに張り付けて演習を続け、7回目の挑戦で150点まで到達。しかし、それ以降の成績は低迷し、10回目の挑戦では6割すら届かない不甲斐ない結果となりました。原因として、難問対策に時間をかけた結果、本来の1級の対策を怠ったことだと思われます。そこで今一度基本に戻り、演習ノートを繰り返しました。具体的な学習法として、間違えた問題は全て漢字練習帳に繰り返し書いて手に馴染ませました。また初受検で知り合った80代のリピーターの方（以下師匠）がご近所にお住まいとのことで、定期的に師匠から自作の資料をいただき、こちらも大いに活用させていただきました。また私からも有志の資料をお送りし、世代を超えた交流も合格への大きな励みとなりました。

合格した瞬間はエベレストの登頂に成功できたかのような心地でした。今後も1級への挑戦を楽しみたいと思います。

お師匠様！ ありがとうございました！

（柏木 健太郎）

柏木さんへのコメント

1級合格、おめでとうございます！合格するまで諦めずに学習するのは、そう簡単にできることではありません。挑戦する中で、学習法を都度見つめ直し徹底的に対策をされていたことに大変感服いたします。またリピーターの方との出会い、世代を超えた交流など「頑張っている同志との出会いの大切さ」も柏木さんは教えてくれました。
今後も1級に挑戦されるとのこと、応援しております！

漢検 生涯学習ネットワーク『会員通信』休止のご案内

2011年の創刊以来皆様にご愛読いただいておりました 漢検 生涯学習ネットワーク『会員通信』は、2025年2月発行のVol.47をもちまして、休止することとなりました。長きにわたりご愛顧を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。

なお、今後は漢字・漢検への知識を深めるコンテンツの発信として「メールマガジン」をリニューアルし、内容をより一層充実させる予定です。

突然の休止案内にて恐縮ではございますが、ご理解を賜われれば幸いに存じます。

メールマガジンへのご登録をお願いいたします

会員通信の休止に伴い、今後は、「漢検生涯学習ネットワークのメールマガジン」に登録していることが、会員資格の条件として必須となります。

現在、メールマガジンにご登録されていない方は、右の二次元コードを読み取り、WEBフォームにアクセスして、2025年4月13日(日)までにメールアドレスのご登録をお願いします。

※2026年3月31日(火)までにメールマガジンへご登録が確認できなかった場合には、漢検生涯学習ネットワークを退会扱いとさせていただきます。

※既にご登録されている方は不要です。

https://www.kanken.or.jp/rd/fk25/nw/1

お知らせ メールマガジンへの投稿募集中!

件名に「メルマガ投稿」と入力し、lifelong@ic.kanken.or.jpまで以下の内容をお知らせください。

※ペンネームの記載がない場合はお名前を掲載します。

合格体験記

どのようにして合格に至ったのか、「あなたの」体験をご投稿ください。

投稿内容:
①お名前(ペンネームも可)　②合格時期
③合格に向けて工夫したこと、励みになったこと
④合格したときの気持ち、感想　⑤今後の目標
※3〜5合計で500字以内

書籍紹介

漢字・日本語に関する書籍で面白いと感じたものを教えてください。

投稿内容:
①お名前(ペンネームも可)
②書名・著者名・出版社名・発行年
③100字程度のおすすめの理由

漢字クイズ

オリジナルクイズを募集しています。

投稿内容:
①お名前(ペンネームも可)
②問題・解答

バックナンバー

会員通信のバックナンバーは、協会Webサイトで読むことができます!
見逃した号やもう一度読みたいコーナーは、こちらからご覧ください。
https://www.kanken.or.jp/kanken/lifelong/news.html

漢検®
公益財団法人 日本漢字能力検定協会
本部 〒605-0074 京都市東山区祇園町南側551番地

※「漢字検定」「漢検」は登録商標です。

https://www.kanken.or.jp/
フリーコール 0120-509-315
月〜金9:00〜17:00(祝日・お盆・年末年始を除く)
※検定日とその前日の土・日は窓口を開設
※検定日は9:00〜18:00

漢字クイズ 解答 ① やきもの ② よせなべ ③ やくわり